十万フーリの理想郷

ゴクイチゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
十万フーリの理想郷

【Ｎコード】
Ｎ３２５６ＢＡ

【作者名】
ゴクイチゴ

【あらすじ】
賞金稼ぎの天南は、今日も危険な仕事をこなす。
貴族に囲われた母親を取り戻すため、平穏な生活を取り戻すため、彼は今日も妹と共に、汚れ仕事を請け負っていた。※残酷な表現が登場しますゆえ、くれぐれもご注意くださいませ。

旅立ちのとき

教皇に許可されたものだけが、入ることのできる禁書保管庫の中には、この世界のなりたちについて記された文章がある。
それは文字を刻んだ薄い金属の板を綴った本で、保管庫の最も奥に鎖をかけて安置されていた。
書物によれば、栄華を極めた人間たちが神をないがしろにしたため、大きな怒りによって世界は清められたと書かれていた。
すべてが許されたときこと、地上は楽園になる、と。
しかし贖罪はいまだ終わらず。
断罪された不浄な文化や技術が滅んだ今も、神の怒りは異形の生き物となって、いまだ人間に牙をむいていた。
大地には凶暴な亜人が、海には船をも飲み込む大蛇が、空には翼を持った竜が、人間の生活を脅かしていた。

ウルゲンチの寒村で捨て子が見つかった。
全裸の赤ん坊が二人、ぽつんと井戸のそばに置かれていたのだ。
朝早く、水を汲みに出た村人が、泣き声も立てずにすやすやと眠る赤ん坊を見つけ、赤ん坊の処遇を巡って、
村では会議がもたれた。
滅多に見ることができない珍しい黒髪の乳児。
村人たちは気味悪がり、誰もがなんやかんやと理由をつけ、引き取るのを断る。
結局、引き取り手が見つからなかった赤ん坊は、村はずれに住む知識人に預けることに決まった。
村人たちに二人の赤子を差し出され、学者は困惑した。
彼女は年若い未婚の女性だった。

郊外に家を構える学者は、村から浮いた存在であり、学者先生と揶揄されて、穏やかな軽蔑を受けていた。
村人たちの目に、彼女の暮らしは浮世離れしたものに映ったのだろう。
学者が生業とするのは、出土した文章や品物を翻訳、研究することであり、珍しいもの好きの領主や、出土品について意見を求める教会騎士団に知識や品物を提供することで、報酬を得ていた。
芸術家とパトロンの関係に近い。
そのため収入は安定しておらず、どちらかというと貧しい生活を送っていた。
そして、村人たちが厄介ごとを押し付けるには最適の相手だった。
欠席裁判のような村の決定により、彼女の意思とは無関係に、学者は突然母親に任じられたのだった。
赤ん坊を引き取った学者の生活は、一層困窮した。
食料が満足に買えないため、ほうぼうに頭を下げてまわることになった。
村人たちは赤子を押し付けた引け目もあり、彼女に食事や家畜の乳をやったが、中には乞食と蔑んで、むげに断るものもいた。
哀れっぽい表情で、コメツキバッタのように手を擦り合わせる彼女の姿は、嗜虐心を呼び起こすものだったのだろう。
必要以上に言葉で嬲られ、残り物の食事を与えられた。
それでも彼女は、赤ん坊を育てるため、くじけることはなかった。
彼女自身、若くして両親を失ったため、自らの境遇を赤ん坊に重ね合わせていたのかもしれない。
学者は名前をつけた。
黒髪をした赤ん坊は、出土された古文書に登場する、東方に住むものたちを連想させた。
学者はいくつかの名前を小さな板に書き写して、それを赤ん坊の上でばら撒いた。
身体の上に乗った板が二人の名前となるのだ。

これは板を中空にばら撒くことにより、人の手から離れた名前が、神の意思により選ばれるという儀式だった。
赤ん坊の身体の上に、それぞれ一つだけ板が残った。
男の子は天南。
女の子は桜子。
学者が二人に名前を呼びかけたとき、まだ目も開かぬ赤ん坊が、二人ともにこりと笑った。
それは貴重な文献を手に入れたときよりも、はるかに貴重な宝物を得たように思えた。
この笑顔、守りたい。
孤独に生きてきた学者が、初めていだく感情だった。
それから学者は身を粉にして働いた。
金が足りないときは、親から受け継いだ貴重な文献を売った。
目が離せないうちはベビーシッターを雇い、歩き始めてからは一層注意を払うようになった。
苦しくも楽しい日々だった。
五年たち、十年たち、二十代だった学者の目じりにしわが刻まれ始めたころ、二人の赤ん坊は、美しい黒髪をした少年少女に育っていた。

学者の生活は食べ盛りの子供を養うだけで手一杯だったので、領主の末の息子の家庭教師を頼まれたとき、否応なく受けざるをえなかった。
家族全員で館のそばに住めることも魅力だったし、二人の子供も雇ってもらえることになった。
教育を依頼された領主の末の息子はハーケスタルと言い、領主がそばめにでも産ませたのか、母親を知らない子供だった。
八歳の少年は、学者によく懐いた。
何をするにも一緒、毎夜学者に手を握ってもらい、寝るまでそばにいさせるという甘えっぷりである。

天南たちは二人きりで先に眠ることが多くなった。
聞き分けの良い少年少女は、文句一つ言わない。
そういう風に育てられていた。
一年が過ぎた。
心を学者に依存していたハーケスタルは、学者の子供たちを邪魔に感じていた。
あいつらさえ居なければ、学者が自分の母親になると考えていた。
少年独特のわがままと嫉妬心で、彼は従者たちに命じ、屋敷で働く天南たちに辛く当たらせた。
夜遅くまで働かせ、わざと食事を抜き、見えないところで従者に暴力を振るわせ、辛らつな言葉を投げつけさせた。
男である天南には、身体を棒で打つことや、傷の見えにくい腹部の殴打といった、肉体的な嫌がらせが多かった。
はじめのうち、ぶたれるたび泣いていた天南は、やがてデク人形のように、黙って打たれるままになった。
桜子は学者の手伝いのほかに、メイドとしての仕事を与えられていたが、そこでは教えられていない仕事を命じられ、
質問をしたら罵倒され、独自にやれば勝手を咎められ、万が一上手くいっても仕上がりが悪いとなじられた。
存在するだけで怒られたので、桜子はそのうち、能面のように感情を隠す子供になった。
二人の私物がなくなっていることも多々あった。
穏やかな性格の学者に躾けられた二人は、他人の心を思いやることができる、素直で優しい子供たちだったため、
そして幼いころから、学者に対する理不尽を見すぎて育ったため、耐えるのが普通だと思っていた。
二人で励ましあいながら、母親に心配をかけないように、仕事場で迷惑にならないように、幼いながらも努力しようと勤めていた。
しかし、何年経っても扱いは変わらない。
二人が感情をあらわにするのは身内といるときだけ。

小屋の中で母親に甘えるときだけが、幸福な時間だった。

ハーケスタルの二人に対する扱いは、もはや迫害と呼べるレベルに達していた。

そして、決定的なことが起こった。

ある日の早朝、二人は雑巾だけを渡されて、館のエントランスに置かれてある、守護聖人の像の掃除を命じられた。

それは二メートルもある大きな彫刻で、慈悲の女神を模ったものだった。

十四歳になった天南と桜子の身長では、到底上まで届かない高さである。

二人のそばでは、若いメイドがにやにやと掃除を監視している。

梯子を取りに行くことも許されなかったので、天南は像を支え、桜子が像によじ登って拭き上げしていた。

残りは女神の掲げる杯だけとなったとき、それは起こった。

元々安定が悪かったのか、意図してそうなっていたのかは、今となっては判らないが、突然ぐらりと像が傾いて、桜子を乗せたまま、エントランスの絨毯の上に落下した。

倒れ行く像を天南の力では、支えることができなかった。

重く鈍い音が館中に響く。

従者たちが何事かと集まってくる。

折れた女神像のそばで、どうにか下敷きにならずにすんだ桜子が、背中を強く打ち絨毯の上で倒れていた。

細かく息を吐きながら、地面に放り出された魚のように、桜子は口を開けて喘いでいる。

絨毯に落ちた女神像は、大きく四つに割れていた。

慈愛を湛えた眼差しが、生首の姿で天井を見上げていた。

従者たちは烈火のごとく怒り、二人を殴った。

ボロクズになるまで殴られた二人は、端正な顔がはれ上がるまで殴られた。

報告を受けた領主が、学者を伴ってやってくる。
酷いありさまのエントランスを見た学者は、床に身を投げ出し子供の許しを請うた。
しかし、代々伝わる女神像を壊されたとあっては、領主も不問にすることができない。
領主の傍に立つハーケスタルが、何かを領主にボソボソと伝えた。
頷く領主。
彼は言った。
子供には罰として鞭打ち。
学者は女神像の代金、十万フーリを一生かけて働いて弁償すべし、と。
ハーケスタルは子供らしく飛び上がってはしゃぎ、学者はうなだれたまま動かなかった。

鞭打ちは即時実行されるため、天南と桜子は、両手を掴まれ裏庭に引きづられていった。
従者たちは興味津々、裏庭に集まるものや、窓から覗くものも居る。
またとない娯楽なのだ。
庭木に手を縛られ、背中の生地を破られた二人のそばに、隆々とひげを生やした侍従長が馬用の鞭を持って立つ。
鞭を中空で振り回すたび、身の毛もよだつような風切り音が、二人の鼓膜を振るわせた。
痛みに鈍感な天南でさえ、鞭打ちの恐ろしさに息を呑んだ。
そのとき、学者が二人の前に立った。
彼女は言った。
子供の罪は親である私の罪。
どうか私を罰してください、と。
侍従長は困惑したが、やがて残忍な笑みを浮かべ、学者の服を剥ぎ取るように言った。

彼は領主の息子のお気に入りの学者が、前々から気に入らなかったのである。
子供の変わりに学者が木に縛り付けられた。
上半身を隠すものはない。
男性従者たちは大げさにはやしたて、女性たちは恥知らずと罵った。
そして鞭打ちが始まった。
大きく振りかぶった鞭が、学者の白い肌に振り下ろされる。
馬用ということで、そこまで強力な威力はなかったが、皮膚が破れ、じくじくと血が流れ始めた。
学者は小さくヒッっと声を出した。
鞭打ちは二十回続いた。
天南と桜子は、従者たちに無理やり頭を固定され、母親が打たれるさまを一部始終見せ付けられた。
それは自らが打たれるよりも、辛く悲しいことだった。
鞭がしなるたび、小さな悲鳴が聞こえる。
天南は怒りと恐怖で、美しかった黒髪が血の気がない白髪に変化していた。
桜子は大きく目を見張り、深く記憶に残そうとしているかのように、瞬きもせず見つめていた。
噛み締められた唇から、血が流れていた。
鞭打ちが終わったあと、学者はよろよろと立ち上がり、寛大な処置に礼をいった。

その日の晩、毛布に包まっていた天南は、母親の寝床から聞こえる嗚咽を聞いた。
母親の泣き声を聞くのは初めてであった。
天南は悔しさで涙が止まらなかった。

翌朝、普段と変わらぬ表情で、学者は朝食を作った。

食卓では、わざとその話題を避けるように、貧しくも楽しい食事が行われた。
学者は朝食を食べた後、一足さきに館へ出かけていった。
食器を片付けていた天南は、桜子に言った。
こんなところには居られない。
桜子も同じことを考えていたようで、天南の言葉に付け足して言った。
壊した女神像のお金を稼げば、こんなところに居なくて住む、と。
学者の小屋の床下に、かつて鑑定を依頼されたまま、結局依頼人が取りに来なかった武器がある。
それは二つに折りたたまれた機械式の弓。
弦のない大型のクロスボウ。
専用の弾装を取り付けるだけで、矢玉を連続発射できるという魔術的しろものだった。
二組の機械弓を、二人は手に取った。
桜子はテーブルに書置きを残した。
天南は僅かな蓄えの金をズタ袋に入れた。
彼らは知ったのだ。
耐えるだけでは何も解決しない。
無垢な少年少女だった二人の顔つきは、今や鋭く研ぎ澄まされ、母親が受けた暴力に対する憤怒と憎悪で歪んでいた。
彼らは家族以外のものを敵だと思うようになっていた。
幼い決意は信念となって二人の身体に刻まれて、暗い情熱が頭の中で燃え盛った。
二人は振り返ることもなく、領主の館を後にした。
長い旅が、始まる……。

旅立ちのとき（後書き）

お読みいただきありがとうございました
これより開幕です

その1

ブハラの衛星都市ラグマンは今、略奪をよしとする亜人たちに包囲され、攻められていた。城門はすでに破られ、迷路のように入り組んだ市街地に、亜人たちが浸透し始めている。

大通りで、路地裏で、騎士たちが敵を食い止めようと剣を振るい、矢を放つ。雄たけびと悲鳴が交錯し、石畳に血が吸い込まれる。

圧倒的な亜人の数。

雲霞のごとく攻め寄せる小柄な亜人たちは、騎士を囲んで地面に引きずり倒し、ナイフで突き、棍棒を振るい、その命を奪っていった。

一度傾いた形勢はくつがえしようがなく、人間たちの組織立った抵抗は失われつつあった。

亜人たちの叫びは、薄く高い壁に囲まれた、領主の館にまでたどりついていた。

館を取り巻く二重城壁の内側には、防衛に雇われた二人の男女が、土嚢に土を被せて作られた土塁の陰で、機械式の弓を構えている。

「ねぇ、いつまでこいつらを倒せばいいわけ？　もう疲れたんだけど」

少女が不満そうにそう言った。

形のいい眉がV字に吊りあがっている。幼さを残しながらも、すっきりと整った顔立ち。肩にかかったセミロングの黒髪は黒曜石の輝きに似たレイヴンカラーが、土ぼこりで薄汚れていながら、流れるような美しさである。丸みを持った鋼鉄の胸あての下に、ノースリーブで膝丈の短い濃紺の皮の服。ヤスリのついた幅の広いリストバンドは腰に挿したナイフを研ぐものだ。茶色のロングブーツは使

い込んでいるのか、くたびれた色をしていた。
彼女の名前は桜子。
領主の館を飛び出して二年、流れに流れて故郷よりはるかに離れたラグマンの町で、臨時の傭兵に身をやつしていた。
「俺に聞くんじぇねーよ。こいつらが引き返すまで、だろ」
桜子の言葉に答えるのは、ともに館を飛び出した少年、天南である。
少年らしい顔つきは、二年のうちに精悍なものに変わり、純粋だった心根はすり減って、とげとげしいものが表にあらわれている。恐怖で変色した白髪だけが少年のころと変わらなかった。
天南は苦虫を噛み潰したかような表情で、振り向きもせず通路の先を睨んでいた。
桜子は唇を尖らせて、少年のほうに向き直る。
「そんなこと言っても、私たち、五時間以上も戦っているのよ。休憩しないと倒れそう」
「我慢しろよ。しかたねーだろ。それとも何か、敵に突っ込むってのか？」
「そうじゃないけど……ああもう、疲れたって言いたかったの！」
少女はプイと目線を離し、怒りを向けるように通路を睨みつけた。
「知るかよ。ったくテメエ一人で守ってみろってんだ」
「ん？　何か言った？」
「いーや、ほら次が来るぞ次が」少年はごまかすように声をあげた。
「もう！」
二人は方膝をつき、土嚢に身体を寄りかからせ、両肘をついて機

械式の弓を構える。右肩に銃尾部をあてがい、頭を傾けて視線を射線に合わせる。
先ほどまで静かだった通路の向こう、アーチを描く石造りの入り口から、亜人たちがなだれ込んできた。

「ウオオオオ、ニンゲンどもを殺せー！」

飛び込んできたのは、皮の腰巻をつけ、肌色の皮膚をした醜い顔のゴブリンと呼ばれる亜人たちだった。筋肉質な細い手足に、身の丈ほどもある野刀を振りかざし、ときの声をあげて押し寄せてくる。
二人は引き金を引いた。鞭がしなるような風きり音を上げて、土塁の影から矢が飛び出した。太く短いクロスボウボルトが、矢継ぎ早に打ち出される。不気味な風切り音を上げて飛ぶそれは、ゴブリンたちの身体に突き刺さる。

「ゲッ！」
「ギャアア！　グアアアアア！」

発射音が響くたび、ゴブリンたちがバタバタと倒れた。
強力な矢じりは、筋肉質なゴブリンの身体を貫通するほどの力があり、肉を引き裂き、骨を砕いた。
正確な射撃が胴体を撃ち抜いて行く。細長い通路は、あっという間に血と内臓の匂いが溢れかえった。

「ひるむなァ！　すすめェ！」

扉の外では一匹だけ、頭一つ体の大きな、赤い帽子を被ったゴブリンが、声を張り上げ、剣を振り回して突撃を煽っている。彼が剣を中空で振るたび、新しいゴブリンたちが仲間の屍を乗り越えて殺到してくる。

天南は怒りの形相に染まる。

「あの野郎、この前逃がしたヤロウだ。畜生！　あのときぶっ殺しておけばよかった」

少しの後悔と、腹立たしさがないまぜになった言葉だ。

「だから言ったじゃない。私は絶対こうなると思ってたし」咎めるような桜子の声色。

「仕方ねーだろ。あの時はこっちもギリギリだったし、失敗したら死んでたんだぞ」

「はいはい。天南君はいつも仕方ない、だもんね」

苛立ちを隠せない天南に、桜子がわざと、たしなめるように呟く。その言葉には明らかに、揶揄する色合いが含まれていた。

「なんだよ文句あるってのか」引き金を絞りながら、天南は言う。

「いいえ全然。リーダーの言うことに、たて突く気はありませーん」

少女の機械弓から発射された矢が、ゴブリンの下腹に刺さった。貫通した矢が内臓を引っ掛け、赤い紐のようなものがゴブリンから飛び出した。

二人は顔色一つ変えることなく、会話しながら淡々と弓を撃つ。

「立派な心がけだぜ、まったく。どんな教育、受けたんだよ」

「何？　何か言った？」

「いいや言ってない。黙って撃てよ」

「さっきからやってるでしょ」

五十連装のクロスボウボルトは、瞬く間にその残弾を減らしていった。

「オオタテ前へ！　イケェ！」

遠く離れた通路の向こうで、赤い帽子が叫んでいる。
見ると、全身が隠れるくらい大きな盾を持ったゴブリンが二匹、通路を封鎖するように大盾を掲げて、ジリジリと進んで来ていた。
分厚い盾に、クロスボウボルトが突き刺さる。が、よほど厚いのか、それとも柔軟な素材をかませているのか、貫通できない。大盾はハリネズミのようになりながら、着実に進んできた。

「やべーぞ桜子。爆弾のやつだ、あれだ！」
「判ってるわよ！」

桜子は弓を置くと、土嚢の裏に転がされていた、布を差し込まれた丸い陶器を手に取った。スイカほどもある球体を桜子は持ち上げ、通路の壁に備え付けられたトーチで火をつける。火口がめらめらと燃え始める。それを両手を振りかざして投げつけた。

「死ね！」

凛とした声とともに、炎の尾を引きながら陶器の球体が飛び、大盾の目の前で石畳に激突して砕け散った。
その瞬間、大盾が激しく燃え上がった。
まるで通路に噴火口が現れたかのように、巻き上がった炎が盾持ちのゴブリンにまで燃え移る。

「グエエエ！　アヅゥイ！　ダァズゲデェェェ！」

ゴトリと音を立て、盾が地面に転がった。火達磨になったゴブリンが、狂乱して駆け回る。盾の後ろに隠れていた後続のゴブリンたちは、燃え上がる仲間をどうすることもできず、また目の前に出現

した炎の勢いに気おされ、オロオロとあとずさる。
そこを天南の放った矢が、守るものを失ったゴブリンたちをなぎ倒してゆく。

「エウッ！」
「ギャッ！」脳天に矢を受けたゴブリンが、もんどりうって転がった。
「おのれェ！　引け引けェ！」

赤帽子の叫びが聞こえ、通路にいるゴブリンたちは、手近な仲間の身体を引きずりながら、入り口に撤退していった。
天南は土嚢に片足を踏み出し、両手で機械弓を掲げ、荒武者のように大声で呼ばわる。

「おら！　逃げるくらいなら来るんじゃねーよ！　どうした、かかって来いよ！」
「もういないっつーの。でもどうするの？　あれで爆弾は最後なんだけど」
「あァ？　……確かに、次こられたらやべーな」

高ぶっていた天南の頭は急速に覚めた。

「チッ、第一、補給はどうなってんだ。一度もきやしねえ」
「まずいよね。他のところが負けちゃって、後ろから敵が出てくるなんて、私、絶対にいやよ」

後ろを振り返っても、硬く閉ざされた木製の扉が見えるばかり。
どれだけ強力な機械式の連装弓を持っていたとしても、もう一度同じ方法で攻められるだけで、防ぐことができない。そして、今までは接近戦を主体とする兵科ばかりを相手にしていたが、城壁を突

破してきた亜人の弓兵が追いついてくるだけで、天南と桜子は、あっという間に殲滅されるだろう。
武器が少なくなった今、引くか留まるかを決断しなければならないのだ。

「どうする？　一旦引くか？」
「そうね。もう疲れたし、無駄死にする義理なんてないし、戻りましょ」桜子も疲れた表情で頷く。
「おし、じゃあせめて、矢玉を全部撃っとくか。弾切れだったら文句言われねーだろ」
「気にしなくていいでしょ。黙ってれば分からないし」
「それもそうか。んじゃ引くぞ」
「はいはい」

二人は陣地を放棄して、背後にある木製の扉の鍵を開けた。扉の先は館の塔に繋がっており、衛兵たちが壁を背にしてもたれ掛っている。衛兵たちが二人を呼び止める声を無視し、通り脱げがてら言葉を残す。

「おい、通路は放棄だ。後はお前らが何とかしろよ」
「そ。私たちは一旦下がって補給してくるから」

衛兵たちが色めき立つさまは、連れ立って進んでいく二人には見えていなかった。
あわただしい足音が、天南たちがやってきた扉に向けて、走り去っていった。

その2

館の通路は兵隊と市民でごった返していた。
二人は避難してきた市民たちを押しのけ、窓に取り付いて短弓を撃つ衛兵を横目に、領主の部屋を目指していた。
通路の先では、深い茶色をした両開きの扉が開け放たれ、中では忙しく人間が動き回っていた。
桜子の眼が険悪な光をたたえて、せばまった。

「何よ、中には兵隊さん、いっぱいいるじゃん。出し惜しみしてるんじゃないの？」
「ふん、おおかた想像はつくぜ。俺たちが死んだら、金を払わなくていいからな」
「だからやめようって言ったのに。目先のカネに飛びついて、天南君がほいほい依頼を受けるから、こうなるのよ」その不満は天南に向かった。
「あ？　おめーも反対しなかっただろが。今になって言うんじゃねえ」
「はいはい。リーダーの言うことは間違いないですよ。あ、領主さん。おーい」

大きな机に置かれた町の地図を真剣に眺めていた中年が、桜子の声に顔を上げた。領主の男は普段どおりの平服で、鎧すらつけていない。しかし、指揮で疲れたのか、顔には疲労の色が浮かんでいた。
「おお、天南君に桜子さん。どうなされましたか」温和な声が二人を迎えた。
「どうもこうもねーよ。西の通路は破られたぞ。今頃は詰め所でや

りあってるんじゃねーかな」
「ひぃ、そんな。守ってくださるとおっしゃったじゃないですか！」
領主の声は一挙に哀れっぽさを含んだ声色に変わる。
「弾がないのに、どうやって守れってんだよ。補給もよこさないで何言ってんだ」
「うん。領主さんは言ってたもんね。武器はいくらでもあるから、湯水のように使っても良いって」
畳み掛ける二人。
領主は哀れなほど取り乱して、落ち着きない視線をほうぼうにやった。
「そんなことは言った覚えが……あなたたちが持って行った武器で、もう終わりなんです」
「そうか。んじゃ俺たちはもう、逃げさせてもらうぜ。清算を頼む」
「そうね。がんばった、がんばった」
完全に逃げると決め込んでいる二人の表情に、領主は渋い顔をしたが、何か閃いたような顔つきになる。
「ううむ……むむむ……仕方ありませんな。でも一つだけお願いが」
「何かな」
領主の言葉にカネの匂いを感じ取ったのか、天南を遮り、桜子がずいと前に出る。
「私の娘のミシマコを、親戚のいるサマルカンドに連れて行ってほしいのです。もちろん追加でお金は渡します」

「うーん、護衛……ってやつなのかな」
「はい」
「しょうがないにゃあ……いいよ」
「こら桜子！　勝手に決めんじゃねーよ！　ガキの子守なんて俺はごめんだぞ」

天南は、会話に加われないまま契約が決まってしまったことに対し、声を荒げるが、キッとした表情で桜子が見返した。眉が吊りあがり、瞳は炎のように燃えている。

「追加でお金をくれるって言うのよ？　わかる？　領主さんの可愛い娘を守るんだから、そりゃもう凄いお金に決まってるじゃない。天南君はそれでも受けないって言うの？」
「え、ええ、勿論です。お礼はたっぷり包ませてもらいます。ぜひおねがいします！」

領主も桜子に追従して相槌を打つ。
天南は二人の剣幕に、グッと上半身をのけぞらせた。そして、領主の哀れっぽい視線に、僅かに良心の呵責を覚えていた。

「……くそっ、しょうがねえな」
「おお、ありがとうございます。ささ、お金をどうぞ。ミシマコ、頑張ってついていくんだよ。サマルカンドにいるお前のおじさんが、後のことはしてくれるからね」

領主はこれ幸いとばかりに、窓から外を眺めていた十二歳程度の少女を捕まえて、二人の前に差し出した。高価なドレスを着た、栗色のウェーブがかった髪をした少女が、キョトンとした目で二人を見上げている。

「館の地下道を通っていけば、離れた丘に出ます。あなた方なら、きっと囲みの外に出られるでしょう。くれぐれもよろしくお願いします」
「任せときな。そうと決まればさっさと行くぞ」
「領主さん、がんばってね。さ、ミシマコちゃん、お姉ちゃんと行きましょうね」

屋敷の地下室には、一見壁に見えるが、押し開きの扉が隠されている。
領主の小姓に案内された三人は、荷物を身につけ、闇の中へ進んでいった。
先頭を行く天南は、腰だめに機械弓を構え、警戒しながら地下道を進む。後ろを行く桜子は、弓を折りたたんで背中に回し、替わりに片手にトーチをもって通路を照らし、もう片方の手でミシマコの手を引いていた。
地下は恐ろしいほど暑かった。薄く水をたたえた地下道は、足を踏み出すたび、ぬかるんだ土が足の裏にまとわりつく。
正体の判らない、ブヨブヨとしたものを踏みつけることもあった。粘液質な三つの足音に混ざって、トーチがパチパチと燃える音、謎の羽音、ガラスを引っかいたような鳴き声が聞こえる。
地下道は狭いため、天南と桜子は一列になって、屈みぎみで進まなくてはならなかった。

「カビくせー通路だな。気がめいるぜ」
「暗いからってすっこけないでよ。天南君がつまづいたら、私たちまで巻き込まれそうだもん」

桜子は少しだけ距離を開けて歩いていた。
おかげで前を進む天南は、明かりが遠く視界があまりきかない。

「お前が前を歩けよ、お前が。こんなもん、誰が先頭でも同じだろうが」
「私はミシマコちゃんを見てるから無理なの。そこんとこよろしくね」
諭すようにいう桜子に、
「テメエが余分に受けた仕事で、苦労してたら世話ねーぜ」
と天南は呟いた。
「何か言った？」
「言ってねえ」
「……」

ミシマコは一言も喋らず、大人しくついて来ていた。
地下道は二人が想像しているより長かった。一時間以上進んでも、未だ出口にたどりつかない。足元に溜まった水は一層深くなり、膝を濡らすほどになった。
ブーツの中は汚水まみれ。足の指の間にまで、ヌルヌルとした泥が入り込んだような錯覚を覚えた。
また、水分を求めて伸びたのか、天井を貫通して飛び出した植物の根が多い。細長く垂れ下がる赤色をした根は、有害な成分を含んでいるのか、肌に触れるだけでヒリヒリと痛む。
二人は泥の中をあさる鳥のように、一層頭を下げ、ミシマコはつば広の帽子を深くかぶりなおした。
地下の高い温度と湿度のため、全員の身体に粘っこい汗が流れた。埃と汗と汚水と泥の汚れが三人に貼りついていた。戦闘の疲労を残したまま、敗残兵のように地下に逃げ込み、かびくさいすえた臭いを吸い込んでいると、いやおうなく気がめいる。
最後のトーチが燃え尽きるころ、ランプを背嚢から取り出しているとき、しばらく立ち止まって休憩をする。武器を抱え、屈んだ姿勢を続けていた天南の膝が、細かな筋肉の痙攣を起こしていた。腰骨も痛い。

桜子もまた疲れた表情で、汚れた黒髪を邪魔そうに頬から払っていた。皮の胸当ての下は、じっとりと湿った旅装束が身体に張り付き、輪郭を浮き上がらせていた。
ミシマコは浮浪者の子供のように薄汚れていたが、疲れのためかうつむいたままである。
桜子が誰に言うでもなくつぶやいた。

「どれくらい歩いたのかしら……」
「……町から離れてるのは間違いねーな」

天南は自分に言い聞かせるようにそう言った。
地下道は直線ではなく、傾斜も一定ではないため、正確なところはわからない。しかし、万が一でも追っ手のかかることを考えると、進むしかなかった。
小さなランプに火が灯る。
桜子が無造作に投げ落としたトーチが、ジュッと音を立てて消えた。トーチが消える瞬間の煙は、言いようのない喪失感をもたらした。

「あーあ、町で戦ってたほうが楽だったかな」
「へっ、町で斬り殺されるより良いだろうよ」

天南は面白そうにそういうと進み始めた。
桜子はしばらく天南の背中を睨んだ後、後に続いて歩き出した。

その3

もはや水路といっても過言ではないほどに、水はどんどん深くなっていく。膝までだった水位は、今や腰まで汚水につかっていた。かび臭さに混ざって、腐った水の臭いが鼻をつく。

ミシマコは青ざめた顔で黙って付いて来ていたが、嘔吐感が限界を越えたのか、しまいには立ち止まり、壁に向かって戻し始めた。

「うぐっ……う……う……うええ……」

水がはねる音に天南は振り返り、

「きたねーな。口に栓でもしとけよ」

「天南君がやってよ。一番近いのは、私なんだからね」

「いやなこった。おら行くぞ。こんなくせーところから、さっさとおん出ようぜ」

「そうね、今回だけは賛成。来なさい」

「あうっ……う……うう……」

二人は再び前を向いて進み始めた。

ミシマコは少しも気分が良くならない状態で、グイと手を引かれる。無理やり手を引っ張られながら、涙を一杯に溜めた瞳で、二人の背中を睨んでいた。

今まで館の中で、静かな愛情に包まれて育ったミシマコにとって、このような気持ち悪さは味わったことがなかったし、自分の存在にまったく興味を示さない二人の男女も、信じられない存在だった。口うるさい家庭教師でさえ、一定の敬意は持っていたものだ。しかし今やお荷物扱いである。

反抗の仕方を知らないミシマコにとって、急激に頭の中に湧いてくる感情を、上手く表現することができなかった。ミシマコは立ち

止まり、頭の中に渦巻く怒りを、どうにかして表現しようと考えていたが、桜子が手を引くため、結局は何も考えられないまま、大人しく手を引かれていた。ミシマコは従順な子供にしつけられていたのだった。

水位は増減を繰り返した。胸までつかることもあれば、乾いた地面が続くことある。

しかし一向に出口は見えなかった。

「あの領主よ、騙したんじゃねーだろうな。いくらなんでも遠すぎだろ」

「娘を預けて、騙すわけないでしょ。お金も貰ったのよ。それに騙す度胸があるように見えないし」

「クソッ、いつまでドブネズミのマネを――あ？　なんだありゃ？」

天南は立ち止まり、弓を頬のところにまで持ってくる。

「何？　出口？」不審そうな桜子。

「いや違う。しっかり前、照らせ」

「もう、何なのよ。……ん？」

小さなランプの儚い光が、トンネルの奥を照らす。黒い水がたたえられた床に、巨獣の腸が引きずり出されたような、腕の太さほどもあるピンク色の物体が横たわっていた。巨大なミミズのように見える身体は、光が届かない奥にまで続いているようだった。なまめかしく光を反射する皮膚が、ゆっくりと蠕動するように波打っている。

天南は弓を構え、狙いをつけた。

「こいつ何だ？　何ていうバケモンだ？」

「知らない。サンドワームっぽい形だけど、ここは砂漠じゃないし。トンネルワームじゃないの？」

「ホントかよ」

適当極まりない桜子の言葉を、口の中でかみ殺しながら、天南は引き金を引いた。危険が図れないとあっては、とにかく先制攻撃である。こんな地下にいる生き物など、ろくなものではないと、天南は考えていた。実際のところ、それはトンネルワームの幼生であった。土の中を掘り進んで紛れ込んだ一匹が、この地下道に住み着いたものだった。

ワームに命中した矢が、派手な水しぶきを上げた。金属の矢じりが硬い地面まで貫通したようで、横たわっていたワームの尻尾に当たる部分が、水中に沈んだまま浮かんでこなかった。

水面に残った体がうねうねと動き始める。それは鱗のない蛇が、痛みにもがいているさまと似ていた。

天南は次々と矢を放つ。昆虫の標本でも作るように、一定間隔で身体に矢を打ち込んでいく。三十センチ間隔で命中したクロスボウボルトは、ワームの身体をどんどん水中に沈めていった。のたうつ身体を的確に射抜く天南の技術は、確かなものがあった。

水中から湧き上がった乳白色の体液が、汚水に混ざっていく。

「おええ……」

ミシマコがまた吐いた。桜子は水に混ざったワームの体液に顔をしかめていた。

五本目の矢を撃ち込んだとき、何かがしきりに崩れる音と、跳ね上げられる水の音が近づいてくる。ランプの光の向こうから、突如、身体をうねらせ中空を飛ぶ、ワームの頭部がやってきた。大きく開いた口には、二重のサークル状に鋭い牙が生え、そこから白い体液がほとばしっていた。

「うおっ！」

頭部めがけて発射された矢を、ワームは身体をひねって空中で避けた。口の中心を射抜くはずだった矢は、ワームの口元をかすめ、肉の一部と歯を少しだけ千切って飛んでいった。
鎌首をもたげ接近してきたワームの身体が、目鼻がないにもかかわらず、正確に天南の位置を認識し、鞭のように伸びた。天南が放った次の矢は、思わぬワームの素早さに翻弄され、身体を傷つけることなく天井に突き刺さった。

「何ィ！？」

わき腹に食いついたワームの牙が、皮の鎧を突き破り、皮膚にまで達した。しなやかに動くワームの身体が、しゅるりと天南に巻きついた。機械弓ごと巻き取られ、胸を強烈に締め上げられる。生暖かい肉の帯が、骨も砕かんとばかりに天南を締め付ける。

「うごっ！　畜……生！」

三重の締め付けは内臓が口から飛び出しそうなほどだった。機械弓を押してワームをほどこうとするも、ギリギリと締め付ける身体は少しも弛まない。わき腹に食いついたワームは、ねじるように頭部を振って、鎧を食い破っていく。大きな剣山が突き刺さったかのように、天南のわき腹に鋭い痛みが走った。熱く燃える傷口から、血液が吸い取られていく感触がした。ワームの細かい牙の中は小さな管が通っており、食いついた獲物から体液を吸い取るのだ。
牙がねじ込まれるたび、肉を引き裂かれる痛みが走る。

「ぐ……ぐ……ぐ……」
「このっ！」

痛みに顔をのけぞらせる天南が、桜子の声を聞いたとき、わき腹にさらに強い痛みが走った。それは今までとは比べ物にならないほどの、強烈な痛みだった。身体の中を熱いものがえぐっている。天南の口から声にならない叫びが上がった。

そのとき、巻きついていたワームの身体がビクリと震えると、それまであった抵抗が消え失せ、ロープがほどかれたように力なく水面に落ちた。

天南がわき腹を見ると、わき腹にくっ付いたワームの頭部に、ナイフが突き刺さっていた。花が咲いたように、ワームの頭部の肉が切り開かれていた。

「危機一髪ってところね」

桜子はそう言うと、ナイフの柄をグリグリと動かし、抜き取った。

「グヘッ」

天南は水の中に座り込んだ。痛みでブルブルと震える指先で、ワームの頭部をわき腹から離す。プチプチと肉を引っ掛けて、大きな頭が離れていった。

満面の笑みを浮かべる桜子は、ナイフをぬぐい、腰に納めた。

天南は真っ青な顔で、桜子を睨みつける。

「テメ……コノ……！　バカヤロ！　バカヤロウ！」怒りで呂律がまわっていない。

「何よその言い草は。私が助けてあげたんですけど？」桜子がジト目で見返す。

「そうじゃねえよ！　そうじゃねえ！　ウ、ウ、オマエのナイフが！　俺の！　腹に！　刺さってるってんだよ！」

天南のわき腹には円形に細かい牙の傷がついていた。しかしそれよりも深く長大な傷がある。桜子がワームの頭部をえぐったとき、桜子は全力でナイフをねじ込んだ。そしてナイフの先端が数センチほど、天南の腹に届いていたのだ。天南のわき腹は、酷く切り裂かれていたのだ。

「助けないほうが良かったの？　じゃあ、今度からそうするし」
「オマエに殺されるってんだよ！」

天南が傷を受けていなければ、桜子に掴みかかっただろう。しかし今は、腹部の出血と痛みで、立ち上がる気力もなかった。

「クソッ……！　クソがっ！」
「私、悪くないもんね」

渡されたランプを両手で持ったまま、真っ青な顔で固まっているミシマコには、誰も声をかけなかった。

その4

天南は鞄から取り出した、ナヴォイペヨーテサボテンの粉薬を飲んだ。これは痛み止めの覚せい剤であり、脳の情報伝達をあいまいにして痛みを紛らわす薬だった。痛みという信号を幻覚に変化させ、苦痛を感じる代わりに、それを映像としてみるのだ。苦い粉薬を飲み込むと、ほどなくして身体が痺れ始めた。派手に血が流れている傷口は、水袋にはいった清潔な水で洗い流し、そこにもナヴォイペヨーテサボテンで作られた軟膏を擦りこんだ。糊のように粘度の高い軟膏は、これにも痛み止めの成分が含まれており、傷口を中心に塗りつけると、わき腹の感覚がなくなった。

今、天南は、痛みの代わりに五色の虹を見ていた。暗い地下道は春の憎しみと汚水の心理を体験できる空間となり、すべての光景が色づいてくっきりと見えた。わき腹の傷口から見える肉の色は、圧倒的なリアリティをもって自己の矮小さと心理を知ることの恐怖感をさらけ出す。

痛みの代わりに幻覚を見ることで、天南は身体の動きを鈍らせる痛みを消していた。

桜子は怒られたことを理不尽に思っているのか、天南の身体を気遣うことをしなかったが、傷口を縫うことだけは手伝った。細い革紐を通した針で、傷口は大雑把に縫われた。

これで治療は終了である。

天南は再び先頭に立って歩き始めた。足取りは以前と変わらない。ビクビクとのたうつワームの胴体を乗り越えて進むと、昇り傾斜の道が続く。徐々に水が引いてゆき、足元の土が乾いていく。地下道自体の大きさも広くなっており、中腰で進んでいた通路が、今は直立して歩けるほど天井が高くなっていた。

地下に潜って三時間強、天南たちの目の前に、ついに人工的な階

段が見えてきた。
ようやくにして、出口にたどり着いたのである。
天南は待つように合図をし、足音を殺して階段を昇っていく。斜めに差し込んできた太陽の光が、目がつぶれるほど眩しく感じていた。
天南はゆっくりと地平に頭をだし、あたりを確認する。
夕暮れの太陽が、地平の向こうに沈もうとしていた。
出口の周りにはまばらに木が生え、出口の南には遠くラグマンの町が見えていた。
出口の周りに人影はない。
天南は振り返り、
「いいぞ。来いよ」といった。
後続の二人が階段を昇ってくる。
出口のある場所は、町から離れた小高い丘の上のようだった。
桜子は両手を頭の上に伸ばし、おもいっきり伸びをした。

「ん〜っ、ん。ふぅ。疲れた。……あーあ、町の空がまっかっか」

遠くに見えるラグマンの町は、夕日と競うように炎と煙を巻き上げていた。亜人たちが火を放ったのか、一際目立つ領主の館からも、チロチロと貪欲な炎が見える。町を囲む城壁の周りでは、亜人たちが縄を受けた人間たちを数珠繋ぎにして、外に連れ出していた。おそらく奴隷にでもするのだろう。

「町は落ちたな。あのまま戦っていたと思うと、ゾッとするぜ」
「うん。危ないところだったね」

二人はほっと胸をなでおろすが、ミシマコは顔から血の気が引いた。盛大に煙を吐く館には、少女の父親がいるのだ。ミシマコは居ても立ってもいられなくなった。

「お父さん？　お父さーん！」

町のほうに駆け出そうとしたミシマコは、疲れが溜まっていたためか、いくらも進まないうちに足がもつれて躓いた。それでも少女は立ち上がり、泥にまみれた靴で、よろよろと町を目指して歩き出した。

桜子がゆっくりとミシマコの前に立ちふさがった。

「こら、どこいくの。死ななくて良かったじゃない」

「お父さん……お父さん……」

夢遊病者のような顔つきで、父を呼ばわり進む少女の肩を桜子が突いた。

軽く押されただけで、ミシマコは体勢を崩し、地面にペタリと座り込んだ。そしてうつむいたまま動かなくなった。ブツブツと何かをつぶやく唇だけが、唾液にぬれて異様になまめかしく映る。

「キミ、心配しなくていいよ。領主さんが死ぬはずないからね」

「……ホントに？」

自信満々の桜子に、ミシマコは顔を上げた。

「うん。だって、領主さんを殺したら、身代金を取れないじゃん」

「お金を払えば、お父さんが助かる？」

「そういうこと」

ミシマコの瞳に輝きが戻った。しかし、

「あいつらに、領主を見分けるアタマがありゃーな」

「……」

天南の言葉が再び瞳を曇らせた。

糸の切れた操り人形のように、座り込んだまま動かなくなったミ

シマコのそばで、二人は荷物を地面に降ろし、雑嚢を開いた。下のほうに詰まった予備の下着や包帯が、汚水に浸され茶色く染まっている。天南は舌打ちしつつ、地図を取り出した。くるくると巻かれた地図は、縁がふやけて崩れていたが、何とか見れそうだった。

最も近い町は、ラグマンの東にあるプロフの町。旅慣れたものの足で二日の距離だった。しかし、ミシマコを送り届けるサマルカンド市からは反対方向。サマルカンドに近づくためには、プロフよりは遠くなるが、五日の距離にあるラビハウズの町を目指すほうが近い。

二人は館から持ち出した食料と、矢玉の残量を考え、地図の上で話しこんだ。天南はミシマコを早く引き渡したいため、ラビハウズを目指すことを主張した。食料も節約すればなんとか足りる量である。桜子はプロフの町と主張した。彼女曰く、ラグマンが陥落した今、近隣にあるプロフでは、防衛の準備を整えているはずである。そこでは仕事が請けられるだろう。カネを稼ぐにはそれがいい、と。

「おいおい、このガキはどうするんだよ。誰が子守するんだ？」

桜子の主張に、天南が噛み付いた。彼は面倒な荷物を背負うことが嫌だった。

「ここに置いていけばいいでしょ」

こともなげに桜子はそう言った。

さすがに天南も、呆れ顔になる。

「オマエなぁ……せめて自分が受けた依頼くらい、責任持てよ」

「お金はもらえました。ほら、これさえあれば……あれ？」

領主から手渡された皮袋には銅貨と指輪、そしてなにやら紙が入

っていた。天南はそれを手に取ると、にやりと笑った。

「こりゃ手形だな。発行したやつの指輪と、その親族が立ち会わないと交換できないってやつだ。まったく、目先のカネに飛びつくから、こんなことになるんだよ。へっへっへ」

にやにやと笑う天南に、桜子は気色ばんで、眉を吊り上げる。

「……さっきのは冗談だもん。言ってみただけだし」

「そうかそうか、そうだろうともよ。へへへ」

「それで、どっちの町にいくの！　今はその話でしょ！」

地下道から追っ手がくることを考え、悠長に議論できる時間はなかった。

結局、プロフの町に行くことに決まった。

「ほら立って。運がよければプロフで領主さんにあえるよ」

「生きてりゃあな」

「……」

桜子はミシマコを無理やり立たせ、手を引いて歩き出した。

機械弓を抱えた天南は、二人を追い越し先頭に立つ。

丘はじきに暗くなろうとしていた。

ミシマコの鬱憤

夜の帳が降りてきて、平野は暗くなり始めた。太陽に代わって、下弦の月の輝きが天を満たし、きらめく星々を従えて、柔らかい光を地上に注いでいた。

夜の息吹の中を、ミシマコは孤独に晒されながら荒野を進んでいた。屋根のない場所で夜を過ごすことなど、もちろん初めてである。ここには召使いもいないし、暖かいベッドもなかった。あるのは冷たい地面と、一応は守ってくれるらしい二人の男女だけ。たった一日で、異次元の世界にやってきたような錯覚を覚えていた。

夜の冷たい空気の中を歩いていると、ミシマコは、寝る前に飲む温かい紅茶が、良いにおいのする香炉が、ふかふかした布団が、とても懐かしいものに思えた。

足が痛い。慣れない徒歩での長距離移動は、足の裏の皮膚を破れさせ、むき出しになった肉が靴の中で擦れる。

汚れた服も着替えたかった。嫌なにおいを放つ服を脱ぎ捨てて、花びらを浮かべた風呂に入りたかった。

しかしどれもが遠い存在である。

ミシマコは、辛さと悲しさが胸の奥からこみ上げてきて、いつしか嗚咽をもらしていた。いつもなら、こういうときは誰かが慰めてくれた。

しかしそばを歩く二人は、ミシマコにまったく気をかけない。

白髪の少年、天南に至っては、うるさいと毒づくありさまである。

涙でベタベタになったミシマコの顔を隠すように、夜の闇があたりを覆っていることだけが、ミシマコにとって唯一の救いだった。

天南は星の位置で方位を確認しながら、早足で歩みを進めていた。夜中の旅は危険だが、ラグマンの近隣には亜人がうろついているた

め、野営をするためには、明かりが絶対に届かない距離まで離れる必要がある。
しかしミシマコが加わったため、歩みは遅い。
天南はいらいらとした気分のまま、西を目指して歩き続けた。普段は何も感じない機械弓の重量が、いつになく重く感じた。

「天南君、お腹減らない？」

後ろを歩く桜子が天南に声をかけた。
言われてみればそうだった。日が昇ったあたりから、土塁の影に詰めていた天南は、水以外を口にしておらず、そして痛み止めの覚せい剤が、身体の中に残っているため、腹が減っていることにさえ気づいていなかった。

「おう、腹減ったなぁ」
「プロフの町は、美味い鳥の丸焼きが名物らしいよ」
「へぇ」

天南は素直に感心した。天南にとって、桜子は生意気で気が利かない、ロクでもない妹だったが、学者について学んだであろう知識の量には、尊敬に値する。

「だから町についたら、それ食べに行こうね」
「おう。あ、そうだ。おいガキ、オマエも一緒に連れてってやるよ」

めそめそと泣く子供を黙らせる方法を、天南は思いついた。メシを食えば大人しくなるという単純極まりないものだったが。振り返ると、ミシマコは二人の会話をまったく聞いていなかったのか、曖昧に頷いている。

「遠慮することないよ、キミが途中で倒れたら困るし」
「そうだよ。オマエに死なれちゃ、護衛料をもらえねーからな」
天南は我ながら素晴らしい思い付きだと、自分で関心していた。
しかしミシマコにとって、それは燻ぶっていた怒りに火がつくようなものだった。二人の言葉を聞いて、ミシマコは言いようのない不快感を感じていた。人格を否定する言葉は、幼い相手であっても内容は伝わるものだ。二人にとって重要なのはミシマコが換金するまで生きていることであって、それ以外はどうでもよいのだと、面と向かって言われては、おしとやかに育ったミシマコも流石に怒った。
「誰が、誰が行くもんか！　もう嫌！　もう歩けない！」
ついに感情が言葉となってあふれ出た。
月の光にきらめく金髪が、怒りに震えて美しくなびいた。
桜子の手を振り払って、ミシマコは地面に座り込んだ。大人しく付いて来ていたが、もはや我慢の限界だった。
何が食事だ、と思う。
少しも食欲などなかった。服に染み付いた地下の臭いをかいでいると、恐ろしいワームが思い出され、天南の裂けたわき腹を思い出した。陰惨な光景を思い出すだけで、喉が締め付けられる感じがして、グルグルと不気味な音が胸の辺りから聞こえるのだ。
「帰りたいよぉ！　お父さん助けて！　びえええええ！」
生まれたての赤ん坊のようにミシマコは泣いた。
涙に乗せて辛い出来事をすべて洗い流すように泣いた。
「おい黙りやがれ。死にてーのか」

ミシマコの肩を掴み、天南が身体をガクガクと揺さぶるも、一度火がついた泣き声は、止まらない。ミシマコをなんとかしないと、泣き声に誘われてよからぬ獣がやってくることを、天南は危惧していた。

「おい桜子なんとかしろよ」

「えー」

桜子は心底面倒そうに眉を寄せたが、このまま泣かれるのは不味いと感じたのか、ミシマコのそばにしゃがみこみ、

「しょうがないにゃあ……」

そう言いながら、ミシマコの身体を抱き上げた。

ミシマコの身体は羽のように軽々と持ち上げられ、お姫様抱っこの形となった。

「ほら、これだと歩かなくて済むし。だから黙って」

思わぬ展開に頭が付いていかないミシマコは、訳が判らなくなって、桜子にはっしと抱きついて、肩の辺りに顔を埋めた。

耳の近くで聞こえるくぐもった泣き声に、桜子は不満そうな顔。しかし腕を放すことはなかった。

天南は問題が解決したと思ったのか、再び前を向いて歩き出した。

それからしばらく後。

遠くに見える町の明かりは、徐々に遠ざかり、小指の先ほどの大きさになっていた。

傾斜のきつい丘を降りきったとき、ついに視界からラグマンの町が消えた。あたりはなだらかに隆起した低い丘が続いている。
丘を降りて少し進んだところ、痩せた木の根元で天南は足を止めた。
ようやくにして、野宿ができる場所まで、町から遠ざかったのだった。
桜子は眠っているミシマコを木のそばに降ろし、小さく伸びをした後、荷物を広げ始めた。革の鞄の中から、小さなランプを取り出して、火を入れて地面に置く。夜行性の動物は光を恐れるものが多く、また相手の姿を確認するために、光はどうしても必要だ。
火打石の音にミシマコが目を覚まし、あたりをキョロキョロと見回している。
桜子は弓を組み立て、立ち上がった。彼女が最初の歩哨となる。
代わりに天南が木のそばに座り込んだ。荷物を地面に降ろし、鎧を脱ぎ始める。ミシマコが眺めていると、ランプの明かりに照らされて、天南が鎧の下に着込んだ皮の服に、血がべったりとはりついているのが見えた。上半身を裸になった天南が、傷口を確認し、再び軟膏を擦り込んでいた。

「あ？　何見てるんだよ」
「……」

ミシマコの首が正面を向き直った。
ランプの向こうでは、機械弓を持った桜子が、うろうろとあたりをうろついている。桜子を見ると、ミシマコは少し気が落ちついた。館を脱出してから今まで、唯一安心を感じたのが、桜子に抱かれているときだった。桜子に対してだけは、少しだけ気を許しても良いような気がした。
安心すると、目蓋が下がってくる。
隣に居る天南は、座り込んでゴソゴソと荷物を弄っていたが、そ

んな音が気にならないほど、ミシマコは眠かった。身体をずらし、木の根を枕にして目を閉じる。ごつごつとした地面は、館のベッドとは比べ物にならなかったが、今はただ、眠れることがうれしかった。

ほどなくして、ミシマコは眠りに落ちた。

太陽が薄く顔を出したころ、ミシマコの身体を揺さぶるものがあった。

眠たい頭はそれを拒絶し、目の前の柔らかいものに顔を埋めた。

「こら起きろ。オマエラいつまでも寝てんじゃねーぞ」

誰だこの使用人は。ミシマコがそんなことを考えたとき、目の前のクッションが突然離れていった。一抹の寂しさを覚え目を開くと、目の前には短く茂る草があった。まだ夢の中にいるのかと考えたが、鼻腔に飛び込んできたすえた臭いが、忌まわしい現実を思い出させる。はっと起き上がった隣では、昨日自分の手を引いていた少女が、すわりながら胸当てをつけていた。

ミシマコは思い出してしまった。

再び眠っていたいと思った。

意識がはっきりしてくると、足の痛みが蘇ってきた。

「うああ……」

辛い現実は赤裸々な姿でミシマコの前に横たわっていた。

ミシマコは朝食に、硬い干し肉の塊を渡された。石のように固いそれは噛み千切ることもできない。隣を歩く桜子は、ナイフで削りながら肉を食べている。

先頭を行く天南は、すでに食事を済ませていたのか、昨日と変わ

らず弓を両手で提げながら歩いていた。
ミシマコは肉を見て、次に桜子を見あげ、再び肉に視線を落とした。腹は空いているのだが、食べることができない。ミシマコは思い切って桜子に声をかけてみた。

「あの……」
「何かな」桜子は前を向いたまま答えた。
「これ、食べられないです。硬くって……」
「そう」

会話が終わった。
結局ミシマコは、歩きながら肉をしゃぶり、唾液で柔らかくして少しずつ食べた。干し肉の表面は無闇に塩気があり、反面中は味がなかった。ミシマコは肉がなくなるまでモゴモゴと口を動かしていたので、顎が疲れてこめかみの辺りが痛くなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3256ba/

十万フーリの理想郷

2012年1月13日00時45分発行